シャンパンゴールドに誘われて

京町萌香
Kyoumachi Moeka

青山ライフ出版

I went to Christmas illuminations. It's because it was attracted by light with a name as champagne gold.

シャンパンゴールドに誘われて　○○。　目次

緑の中の訪問者 6
麻耶という名の女 28
郵便ポストに誰がいるの？ 48
シャンパンゴールドに誘われて 64
雨のあとに君とデートする 82
夫の秘密 102
アンティークドール 122
「サフラン」の夜はふけて 142
レオンのひとりごと 162
あとがき 170

シャンパンゴールドに誘われて

緑の中の訪問者

大型連休がスタートした。今年は天気に恵まれ、ここ軽井沢の街も観光客で混み始めている。木々が緑に染まり、その間からこぼれる太陽の日差しがまばゆい。この青もみじに染まる景色にほれ込んで、この場所を住居として選んだのかもしれない。村木早苗はそう感じるのだった。

早苗の住む家の近くに雲場池がある。この池の周りを散歩するのが日課だった。新緑の頃は本当に癒される。そして秋の紅葉も一段と美しいことでも有名だった。水面に映る景色はまるで絵画のようだった。水面を静かに水鳥が通る。かるがも、まがも、そして時にはリスも姿を見せるのだ。

池の周りを散歩しながら、早苗はアイデアが浮かぶことも多かった。自然の空気感がそうさせるのだろうか。早苗の一日のスタートがいつもここから始まると感じていた。

今日の夜は軽井沢駅に近い大賀ホールでコンサートがある。出版社の編集担当の角田さんからのお誘いだった。女性歌手の杏里というから早苗もなぜか身近に感じた。クラシックだと少々飽

きる。

コンサートは思い通りの盛況ぶりだった。さすがに「オリビアを聴きながら」では昔の思い出と重なり、世代の近い角田さんとは、お互いなつかしさに盛り上がった。

軽井沢まで、東京から新幹線でわずか70分の近さだ。東京からコンサートを聞きに来る人も多いだろう。終了後もその足ですぐ帰れる。それ以外は別荘に滞在する家族だろうか。

帰りは遅くなりそうなので、早苗は自分の車を駅前の駐車場に止めていたのだった。

コンサート終了後は、駅前のよく行く店で角田さんと食事をする予定だった。彼女はまずビールを頼み、早苗はノンアルコールビールで二人乾杯した。最初の一口の美味しさに二人笑顔になる。仕事と関係のない話に盛り上がる。

角田さんは、今日の夜はこの先のアパホテルに泊まり、明日軽井沢のアウトレットで買い物をしてゆっくり帰ると言っていた。

「どぉ？　軽井沢には慣れた？　直木賞とって5年くらい経つでしょ？　受賞したときは確か50才少し前だったものね。それから数年して執筆活動のためここに移り住んだじゃない、やはりこういう自然の中にいると文章が自然にわいてくるのかしらね」

角田さんの問いに早苗は、

「そうね、受賞したら一気に仕事が増えたのね。連載も増えたし。私は青森の田舎育ちだから、

都会のマンションに暮らすより、こうして自然の中が好きなのかもしれないわ。あまり不便さも感じないのね。

東京にも近いし、軽井沢って結構作家さん達が多く暮らしているのよ。家を探していたら、高齢の知人の紹介で、古い別荘を持っている人のことを聞いたの。

最近足が不自由になり、東京から通うのも大変になり、よかったら使って下さいとのお話がきて、かなり安く譲ってくれるということになったのね。こんないい話はないと思ったわ。

それから少しリフォームして住むことになったのよ。でも湿気は多いし冬は寒いしね。今は猫二匹とのんびり暮らしているわ。雲場池が近いから、午前中は散歩するの。そこから色々とアイデアが浮かぶ気がするわ。

自分自身が自然体でいられるから、住むところって大切かもしれないわね。衣食住でいうなら私は住を一番にとるかな」

「なんかうらやましい。コンサートが終わって外に出たら、都会でなく緑に包まれた自然の風景じゃない。不思議なくらい余韻に浸ることができて、今日は終わった後も最高な気分だったわ」

そういうと角田さんはすでに赤ワインを飲み始めていた。そしてマルガリータのピザを味わいながら、

「私は衣食住だと、やっぱり食かな。中野の安いアパートはまだ一人で住むのに十分我慢できる

感じだし……

とにかく直木賞受賞作〝とまどいの夏〟にあらためて乾杯！　そして早苗さんの今後の活躍にまたしても乾杯だわね！」

「角田さんやめてよ。もう受賞から何年も経っているし、世の中の人、私のことなんてたぶん誰だかわからないから、大きい声で名前とか言わないでお願い！」

そう言って角田さんを見ると、すっかり酔って上機嫌だった。

「案外、早苗さん謙虚なんだわ。もっと自分を宣伝したほうがいいんじゃない？」

角田さんは早苗のことを、村木と呼ばずに下の名前で呼ぶくらいの仲だった。仕事上はもちろん、それ以外でも二人はこうしていい関係が続いていることが、早苗にとってもプラスになることが多かった。

早苗は受賞したときの高揚感を再び思い出し、胸が熱くなるのを感じていた。ここ軽井沢に移り住み、意欲的に文章が書けている気がするので、自分の選んだ場所は間違っていなかったと感じた。

角田さんがだいぶ酔っている様子なので、ホテルまで行けるか早苗は心配になった。テーブルに上半身がもたれかかっている。アパホテルまで行ってあげるからと、早苗は心配そうに言った。

「やだぁ、大丈夫だって。あのホテル駅から見えるすぐそこだよ。ほんとはさ、反対側のプリンスホテルに泊まりたいけどさ、アパホテルは、お一人様にも手頃な金額なのよ。私にはぴったしかな。男もいないしさぁ～。寂しい一人寝ですわよ」

早苗はついに本音がでたと感じた。角田さんはずっと編集畑で、有名な作家達を担当するベテラン編集者の一人だった。早苗も角田さんに日々助けられているのだった。

40才半ばで独身。美人というわけではないけれど、ボディは女から見ても、それなりにメリハリがあり、男にもてるのではないかと思っていた。確か数年付き合った男とは最近別れたと聞いていた。

それに比べ、早苗は自分の体にコンプレックスを抱いていた。薄っぺらで、全然魅力的ではない体を、いつも風呂上りにみるたびげんなりするのだった。そして痩せていても、肉がさらに下降していく現実に、女の魅力からすでに遠のいている気がした。

早苗は角田さんの体に手をかけ、半分支えるようにして店を出た。彼女のふくよかな体に触れたとき圧倒されそうだった。

「ここで早苗さん大丈夫だから。ほらあの先にホテル見えているでしょ？

ありがとね。連休だからあなたも少しゆっくりしてね。まだ締め切りまで日数あるし」

「わかったわ。今日はありがとう。楽しかったわ。角田さんもゆっくり休んでください！　また